

D.H.ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論 — その3

田形みどり*1

An Examination of the Resonance between D.H.Lawrence and *Lao-tzu* and *Chuang-tzu* — Part 3

Midori TAGATA

Abstract

In 'An Examination of the Resonance between D.H.Lawrence and *Lao-tzu* and *Chuang-tzu* — part 1', I treated the resonance between Tao in *Lao-tzu* and *Chuang-tzu* and the flows of the universe D.H.Lawrence told us about in his works. In 'part 2', I treated the resonance between the heartless elements of *Lao-tzu* and *Chuang-tzu* and the inhuman and impersonal aspects of D.H.Lawrence's literature. In this paper: 'part 3', I am treating the common attitudes between them toward knowledge, ideas, and consciousness.

D.H.Lawrence, Lao-tzu, and Chuang-tzu really wanted to fulfill their lives by harmonizing with the circling currents of the universe and various flows of nature. They discovered it was too much knowledge, ideas in mind, self-consciousness, and cares that prevented them consummating their lives. D.H.Lawrence loved nature flowing vividly without caring and worrying and wanted to be in the flows of the universe. Lao-tzu and Chuang-tzu wanted to be innocent without caring and thinking and assimilate into Tao where everything in the universe appears and disappears.

Keywords: D.H.Lawrence, Lao-tzu, Chuang-tzu, nature

1. 観 念

D.H.ローレンスも老子・荘子も、宇宙そして自然界に流れる諸々の流れを感じ受けとめながら、自らもひとつの流れとして、自己の内部に沸き立つ流れに促されるままに生きた者たちであった¹⁾。老荘思想が森羅万象を「道」の造化とし、流れとして捉えたように、D.H.ローレンスも万有をそれぞれ個々に流れている流れ (flow) として感じ取った。例えば、D.H.ローレンスは、雌ライオンもその餌食となるガゼルもそれぞれ固有の肉体を抱えその肉体の流れを流れている流れとして感じ捉えていた。

腹を空かした雌ライオンの群れがガゼルを追う。ライオンの一頭がガゼルの背に背後から飛び乗り、それと同時に他のライオンがガゼルの足に食いつく。倒れたガゼルのもとにすかさず他の一頭が食いつき、頸動脈を咬み切りと

どめを刺す。空腹が雌ライオンの血液を沸き立たせ、体じゅうの筋肉を充電し、精気を敏捷に研ぎ澄まし、狙った獲物を仕留める執念を燃え立たせる。ガゼルはライオンの燃え立つ気迫を直観し、凍りつく恐怖を抱え逃げ惑う。雌ライオンもガゼルもそれぞれ固有の生命の流れである。両者とも大自然の中で肉体を抱え、その肉体の流れを無心に流れている生命である。時には温かい陽ざしの中で憩い、時には降りしきる雨の中でじっと体内の静けさを守る。子に乳を与え安らぐ一時もあるであろうし、水溜りの日照りの中をよろよろと歩くこともあるであろう。それぞれが固有の肉体を抱え、その肉体の流れを坦々と流れている。

一般に人々は雌ライオンがガゼルを襲う場面を見ると、その残酷さに目を覆い、その野獣性は文明化された人類には無縁なものとして、ライオンに^{どうもう} 猛猛な獣というレッテルを付けライオンを卑下する。しかし、D.H.ローレンスは、血の滴るガゼルの腸を食うライオンの姿にライオンの生命

の流れを感じ取るのである。そして、そこに肉体を抱え、無心に流れている生命のやさしさを感じとる感性を D.H. ローレンスという作家は持っていたのであった。老荘思想の言葉を用いれば、D.H.ローレンスは、その猛々しさの中に肉体存在であることの根本である「妙」の一相を、つまり、この上なく繊細で初々しく柔軟であり、また極めて弱く脆くもある肉体の無心な流れを感じ取ったとも表現できよう。

D.H.ローレンスが残酷極まりないとするものは、人間が生み出した観念 (idea) である。千本の杉が林立する森を目の前にして、千の材木があるとしか計算しない観念である²⁾。D.H.ローレンスと老荘思想に共通していることは、両者とも、観念・言語を通して得る膨大な知識・過剰な精神主義というものを常に批判しているということである。「観念なるものは、人類がかつて注入された、もっとも危険な病原菌である。頭脳に注ぎこまれ、そこで暴れ回る昆虫のように、キリキリ舞いする観念こそが、今日の我々の不幸のいっさいの源である。」とローレンスは言う³⁾。本来、生は肉体内部の自発中枢から営まれなくてはならない。しかし、今日人々は観念にむしゃぶりつき、数々の理論を噛み砕き、それらを消化吸収しようと必死になる。頭脳思考をフル回転させ噛み砕いているうちに、肝心の内部自発中枢は硬直し、機械的になり、磨滅し、不協和音を発して軋み、崩壊が始まる。人々は肉体内部の自発中枢からではなく、頭脳思考に頼って生きているのであり、精神主義に偏り、人々の状態を描いてみると、腹部に大鏡を垂直にあて、その前に立っているようなものである、とローレンスは言う。鏡には上半身が映り、下半身がない。上半身のみが自己が見えるだけだという⁴⁾。思想は生き生きとしたダイナミックな関係 (interchange) とその相互作用 (reaction) とを具体化し記録した究極の結果である。思想を生み出すダイナミックな動機が満たされなかり、思想は完全に表出されない。既成の思想だけがあり、そこに動機が不在であるならば、その思想は生きた思想とはならず、観念に落る。また、完成した思想を引き続き利用してダイナミックな効果を取めようとすれば、機械的代用となり、いっさいの生きた活動の廃棄につながる。ここから憂慮、精神的麻痺、神経衰弱、精神萎縮などの恐るべき結果が生まれるとローレンスは述べる⁵⁾。真の思想は、樹の葉のように、樹液の活力のうちから、生の偉大な原動中枢の計り知れない奔出にしたがって、常に新鮮に常に新たな様相を呈し湧いて出るものである。純粋な思想をむりやり実行に移すのは、いっさいの生の死であるとローレンスは言う。大脳思考によって観念的に掻き立てられた情熱や欲望は致命的であり、ただ理想にのみ根拠をおく情熱はただちに有毒なものになる。ローレンスは、「何故、我々は子供の心に、彼自身の経験と何ら係ることがない、また彼自身のダイナミックな活動に全く関係のない事柄を詰めこまなければならないのか。」と社会に問う。外

部から人の心に持ちこまれ、彼自身のダイナミックな本性に相応するところのない観念はすべて彼にとって躓きの石であり、真の個人的活動を抑止する原因であり、精神生活の乱調を引き起す源となるとローレンスは述べる⁶⁾。生は自ら責任を負う内奥の自発中枢によって、人間相互間のダイナミックなヴァイタルな非観念的な回流のうちに営まれなければならないとローレンスは言う。蒼白い思惟は空回りする精神の虚しい眩暈を巻き起こし、健康な生命を蝕むのである。

『老子』・『荘子』も知の放埒に身を委ねることが危険この上ないことを繰り返して警告する。『老子』に「学を絶てば憂い無し。唯と阿と、相い去ること幾何ぞ。善と悪と、相い去ること何若。」とある⁷⁾。「唯」は年長者に対する礼儀正しい応答の言葉であり、日本語の「ハイ」にあたる。「阿」は敬意を欠いた生返事であり、日本語の「アー」もしくは「ウン」にあたる。これは、「学問をやめてしまえば、人生に憂いはない。ハイと答えるのとアアと返事するのと、どれほどの違いがあるというのだ。善と悪にどのような違いがあるというのだ。」と、儒家の仁義道徳を学問として学ぶその姿勢を批判している。膨大な言葉と理屈を積み上げ議論し、末梢事にいたるまで細かく詮索し、人間を際限のない観念の泥沼の中に追いこんでいく学問姿勢への批判である。老子は、言葉では真理を伝えることができないという立場をとる。老子が絶対実在として捉えている「道」は、言葉では表現しきれない不立文字の世界である。例えば、一輪の蓮を示し、「道」と言えば然りである。その根が沈む泥を示し「道」と言えば然りである。蓮の花の淡いピンクの色を示し「道」と言えば、それも然りである。その水面に降る雨音を示し、「道」と言えばそれも然りである。自ずと然りと流れ森羅万象を生滅している渾沌を「道」とすると、それはどのような表現を用いても表わし尽くすことはできないのである。道家研究者・森三樹三郎は、「そのありのままの真理を捉えるには、体験的な直観によるほかない。」と述べている⁸⁾。知るということは、分かるということであり、物を分け、分析することである。知識は、一つのを二つに分断し差別をつける。分断は無限に行なわれ、右と左、比と彼、善と悪、美と醜など、無限の対立が生ずる。故に「道」の総体を認識しようとする、知識はありのままの真理を伝えるどころか、かえってこれを破壊する張本人となる。従って、老荘思想では言葉による認識を戒め、「道」の中に身を置き、直観により体得していくことをする。「汝の知を擷め、汝の度を一にすれば、神将に來たり舎らんとす。」⁹⁾「お前の知恵のはたらきをしまいこんで、お前の心の住みかを一にしたら、精気がやってきて宿るだろう。」ということである。「道」を論じようとする、かえって「道」に至ることはできず、「道」を見きわめようとする、かえって「道」を見失うことになるのである。だから、弁じたてることは沈黙に及ばないし、「道」の道理を聞くべきではないので

ある¹⁰⁾。「道」の実相のひとつを万物斉同^{ばんぶつせいどう}と捉える老荘思想においては、すべてが相対的になる。「道」においては生と死、是と非、美と醜、長と短、満と空といったすべての対立が相対に帰し、対立が消滅する¹¹⁾。その実相は合理的認識方法ではつかめないのである。「道」は分析を許さない「一」であるからである。道を無理に分析しようとするれば、必ず分析し尽くすことのできない部分を残す。「是非の彰かなるや、道の虧くる所以なり。」¹²⁾是非が彰^{あきら}められると、「道」のすべてを包含する渾沌が虧^{へう}られる。生きてる渾沌である「道」はもともと「成」もない「虧」もない「一」たる実在である。

「一」たる「道」の無限を『莊子』では続けて次のように例える。「成ると虧れるとのわかち有るは、故より昭氏の琴を鼓げばなり。」昭文は琴の名手である。彼が琴をかきならせば、そこには妙なるメロディが成立する。しかし彼が手にするメロディの背後には、彼が手にしない無限のメロディが存在し、彼のメロディはその無限なるメロディの一つにすぎないのである。彼の手は一つのメロディを「成す」ことによって無限のメロディを「虧っている」のであり、この意味において、彼の「成」は同時に「虧」であるともいえる。つまり彼において「成」はその「虧」と対立しているのである。莊子は、昭文のひたむきな精進も偉大さも肯定はするが、しかし「道」に立脚すれば、昭文の知巧も人間の作為のひとつにすぎない。「一」たる実在としての「道」は人間の知巧を超えたものであり、人間の作為では明らかにすることはできないものであり、そこには「成」も「虧」も無いのである¹³⁾。この「道」の「一」たる無限の実相を例えるのに、天籟と地籟が挙げられる¹⁴⁾。天籟は天に流れる風の音であり、無音である。その天風が地上に吹くと、それは木の葉をそよがせ、砂を舞い上がらせ、洞窟を吹抜け、無限の音色（地籟）を奏でる。「道」の実相は、この天籟地籟の実相でもある。

道家研究者・福永光司は、「老子の「道」は光を闇の根源としてではなく、闇を光の根源として捉える。暗く定かならぬものを明晰なるものの、言葉なき世界を言葉ある世界の根底に考える。老子において「道」は言葉を超えたところに実在する無名の混沌であり、「道」は言葉でもなく言葉とともにあるのでもなかった。」と述べている¹⁵⁾。老荘思想は、明晰なロゴスを追究する哲学ではなく、ロゴスを超えたもの、渾沌を問題とする哲学であり、ヨーロッパ的な理性哲学および近代科学の合理思考と対極に立つ哲学である。その渾沌は、遠い天地の始めから存在するものであり、暗く見きわめがたい「玄」のまた「玄」である。渾沌である「道」を概念的に認識しようとするれば、その認識には破綻分裂が生ずる。故に莊子は、人間の心知の渾沌化——心知の判断を放下了した未始有物への沈潜を説き、さらに心知の主体としての人間そのものの自然への渾沌化を説いたのであった¹⁶⁾。

老荘思想は、人間の知識が人間を偉大にするとともに死

に至る病に追いこむ両刃の剣であることを知っていた。人間を自然と対立させ、人間性を神性と動物性とに区別し、人間の行為を善と悪、正と邪、是と非、賢と愚、等々に分ち、現在を過去と未来に、事象を原因と結果に引き裂く思考が、人類の輝かしい文化と栄光の創造者であるとともに、人類の倨傲と破滅、生命の不安と恐怖、精神の分裂と挫折の危険をも同時に含むものであることを彼らは熟知していた。また未来に向けられた希望と理想と勇気が絶望と妄想の怯懦に変わりうることを、価値的規範が人間を高貴にするとともに惨めにし、傲慢と偽善、卑屈と自己喪失がそこから生じることを彼らは知っていた。「人間がもし生命の安らかさを最上の価値とするならば、生きている渾沌を生きている渾沌として愛するがいい。」と莊子は言う。生きている渾沌を生きている渾沌として愛することは、分析的な思考の限界と危険を自覚することである。生命なき秩序よりも生命ある無秩序を愛することである。灰色の理論よりも生命の木の緑を愛することであり、認識よりも体験を、抽象よりも具体を重んじることである¹⁷⁾。これらの点で、D.H.ローレンス思想は、老荘思想と全く同じ振幅で大きく共鳴する。人間の生命のいとなみは常に一つの有機的な全体であり、そこでは全体を全体としてとらえる英知が何よりも重要であることを両者とも知っているのである。

老荘思想において「道」を知ることは、「道」を忘れて「道」に同化することである¹⁸⁾。「道」に達した者だけが、すべてが通じて「一」であることを知り、分別の知恵を捨て、すべてを自然のはたらきのままにまかせるのである。その究極の境地とは、自ずと然りと流れる「道」にひたすら因り従うだけで、その因り従うことさえ意識しなくなることである¹⁹⁾。「万物を尽く然りとし、而して、是を以て相蘊み」、無心忘我の境地に遊ぶ達人の外貌は、全く愚鈍な人間のものであるといふ²⁰⁾。「至道の精は、窈窈冥冥たり。至道の極は昏昏黙黙たり」と描写される「道」という実在世界と一つになった達人の有り様は、薄のろの愚者に見えるというのである²¹⁾。確かに雨あがりの山道に、雨に浮かれて迷い出で瞬きもせずじっとしている土色の巨大な疣蛙と達人との間に、差別は無いのである。老荘思想とD.H.ローレンス思想は共に、過剰な知識を浴び、観念的になることの危険を訴えている。また、両者は共に、意識の在り方を重要なテーマにしていることにおいても共通している。

2. 意 識

福永光司は、「今は吾れ我れを喪れたり」—「喪我」は忘我と同じ意味であるが、子慕のこの言葉は、齊物論篇全体の帰結とも見ることができよう。」と述べている²²⁾。また、「道」とは、自然ということであり、あるがままということであり、人はこの「道」の立場に立つ時、一切存在

と一つになることができる。一切存在と一つになるとは、「吾れ我れを葬れた」境地である。そして吾れ我れを葬れた境地において、自己は始めて真の自己となるのである。」と述べている²³。この「吾れ我れを葬れた」境地において、初めて真の自己となる老荘思想の境地は、儒家の自己完成および近代合理主義社会の自己完成と全く対極を成す境地である。

D.H.ローレンスは、1928年6月に「無頓着 (insouciance)」という題名を付けたエッセイを書いている。スイス・レマン湖のホテルに滞在していた時に隣室に宿泊していた英国人の老婦人について述べたエッセイである。雷鳴が遠くで轟き、草いきれがムンムンとする午後、ローレンスはベランダに出る。老婦人もベランダに出て来て、二人は会話を交す。婦人は、イタリア、ムツリーニ、ファシズム、自由等について話してくる。ローレンスは側に咲いているタンポポのようにそこに在り、目の前で大鎌をふるい草を刈っている農夫たちをのんびりと見ていたののであるが、婦人によって抽象的な世界に投げ込まれてしまう。婦人は、山々や湖、桜や草を刈る農夫たちを見に英国からやって来ているのに、目の前に展開しているそれらの光景には目もくれず、黒シャツ党とか善悪といった、彼女には直接関係のない抽象的な事柄に気をわずらわせる。彼女は気がかり (care) という化け物に取り付かれているのだ、とローレンスは言う。彼女は彼女が今いる場所で充足できないし、また彼女が今手にしているものに満足できないのである。総じて人々は気をわずらわせる。自己には直接関係のない遠い外界の事柄に気をわずらわせ抽象的になる。しかし、ローレンスにとって実際に生きるということは、己が今いる場所で周囲のものと感性を通しての直接的な繋がりを持つということであった。ローレンスと湖、山々、桜の木々、草刈る農夫たち、ライムの木々の中で騒いでいるアトリという鳥たちの間には、感性や直観 (intuition) を通しての直接的な繋がりがあった。それが生きて在ることであり、自己充足であった。ローレンスは、「タンポポのように」という表現を用いているが、それは、大地に根を張り、自らの生命をしっかりと抱え、そこに訪れるさまざまな自然界の流れに感応しその生を流れているタンポポのようということであり、別の東洋的表現を用いれば「無心に」ということだろう。

D.H.ローレンスは、自己が自覚できる意識、つまり現代人としての意識とか、男性としての意識とか、自意識というような意識を表層意識と呼び、自己が自覚できない無意識の領域の、肉体の底に蠢く意識とか、血が抱えている遺伝的意識というような意識を深層意識あるいは根源意識と呼んでいる。人々は常に外界が気がかりになり、その表層の意識が外界に向けられ、それと同時に自意識が目覚め、自意識は常に耿耿とした状態にある。気がかりや自意識は無心没我を妨げるのであり、「無頓着」と名付けられたエッセイは、常に外界が気になり、それ故に、自己の深

奥の世界に降り、そこでためためと漂い、自己充足することが出来ない現代人の意識の有り様を示している。題名の無頓着という言葉は気がかりと対極になる言葉であり、ローレンスは無頓着 (insouciance) とか無関心 (indifference) といった言葉を、自己の生命だけをしっかりと抱え、屈託なく流れている自然界の生命に通ずる言葉として、これらの言葉を好感を持ってしばしば用いている。そして、また、これらの無頓着・無関心という一般には非人格的内容を示す言葉とされる言葉は、D.H.ローレンスの作品においては逆に、常に外界が気になり外界に執着し、それによって引き起される過剰な自意識に精神を疲労困憊させてしまう現代人の意識の有り様を逆照射しているのである。

エッセイ「ヨーロッパ対アメリカ」(1926)の中で、「地中海の沿岸に暮すと、張りつめた緊張がほぐれる。アメリカの神経過敏な狂おしい気がかり (care) の中によりも、地中海に暮らす人々の深い無頓着さ (insouciance) の中に生命はずっと豊かに溢れている。無頓着さは、素朴な実直さの源である。」と書いている²⁴。この無頓着さも、大地に根ざし、自己の生命をしっかりと抱き、坦々と日々を過す人々のおおらかさであろう。

上記の英国の老婦人と対照的なのが、紀行記『イタリアの薄明』(1916)に描かれたイタリア人の糸を紡ぐ老婆である。ローレンスは、1912年の夏から1913年の春までイタリアのガルダ湖の湖畔で過すが、湖に面した斜面の頂きに立つ教会堂の燦燦と陽が降り注ぐテラスでこの老婆を見かけ、その無心に糸を紡ぐ姿に魅了される。老婆は陽に晒され、その服もエプロンも濃い赤のスカーフも手も顔も陽に漂白されて、灰色の石や灰緑色の葉のように色あせて見える。老婆は土のかけらのようであり、陽に漂白されたテラスの敷石のひとつのようにそこに在った。

老婆はテラスに立ち彼女を見つめるローレンスに気をとめることもなく、そよ風のように自然の流れに乗り (spontaneously, like a little wind), 糸を紡いでいる。その動きには意図的な動作がない (motion without thought)。「糸を紡いでいるんですね。」とローレンスが声をかけると、「そう」という返事が返ってくるものの、意識的にローレンスに注意を向けようとするところがない。その空のように澄みきった卓越した青い目も、意識をこめて見るということがない (they had no looking in them)。無意識の世界から、時折微かな注意力を注いで (with a little, unconscious attention) 糸をみつめる。「古い紡ぎ方ですね。」と再びローレンスが声をかけると、驚のような動きで振り向き、ローレンスを見つめた。その眼には、夢中で没頭している者の目の微かなきらめき (a faint gleam of rapt light) があった。彼女にとってローレンスは取るに足らないひとかけらの外界でしかなく、単なる一時的な環境に過ぎず、見知らぬ者でしかない。彼女の側に立っている男が、彼女とは違う別の世界を持ってい

るのだということなど彼女は思い付きもしないし、そんなことには無頓着なのである (she didn't care)。ローレンスを再び見つめる彼女の眼はすばらしく、変化しない眼 (unchanging eyes) であり、それらは見ることのできる天上界 (the visible heavens) のようだ、とローレンスは描写している。無心 (unthinking) であり、純粹な澄みきった無意識の世界に開いている花のようだ (like two flowers that are open in pure clear unconsciousness)、と描いている。彼女の眼には自意識がない (without consciousness of self) のである。太陽が降り注ぐテラスで糸紡ぎに没頭している老婆の意識は、彼女の肉体の中心に注ぎ込まれているのであり、糸を紡いでいるその姿勢で、老婆はひとつのまとまった宇宙そのもの (whole universe) なのである。27歳のローレンスは、自己充足したこの老婆の青い眼に魅了されてしまうのであるが、老婆の眼にこの自意識のないすばらしい澄みきった無意識の世界 (the wonderful clear unconsciousness) を具現させているのは、老婆自身がひとつの宇宙 (whole universe) であるからだ、とローレンスは述べている²⁵⁾。

「糸紡ぎに没頭している老婆は、彼女自身がひとつの宇宙であるが故に、彼女の眼には自意識がない澄みきった無意識の世界が具現されているのだ」という D.H.ローレンスの言葉は、この章の冒頭で引用した福永光司の「吾れが我れを喪れた境地において、自己は始めて真の自己となるのである。」という言葉と深く共鳴するものである。東洋文化圏に流れている「無心」という言葉に匹敵する言葉は西欧文化圏にはない。しかし、without thought, unthinking, without consciousness of self という言葉を使い描写している老婆の姿は、雑念が消え、自意識さえ消え失せ、糸紡ぎに没我無心になっている姿である。そして、その姿勢で老婆はそよ風のように流れに乗って糸を紡いでおり、そよ風が自然空間を流れるように、老婆の生命が屈託なく自己の内部のリズムに乗り体内を巡り流れている様子をローレンスの描写は伝えているのである。D.H.ローレンスが糸を紡いでいる老婆はひとつの宇宙であると表現している「ひとつの宇宙」である状態は、宇宙大自然の流れの中でその流れのひとつになりきることであり、正に老荘思想の「道」に同化するということと共鳴するのであり、福永光司が表現している真の自己となるということと共鳴するのである。

『莊子』齊物論扁冒頭で登場する南郭子綦^{なんかくしき}は、机にもたれてすわり、天を仰いで大きな息をはき、茫然としていっさいの相手の存在を忘れ去っているかのようである。身体は枯れ木のように、心はまるで冷えきった灰のようである。それは「今、吾れ我れを喪う」状態である。弟子の偃^{えん}がその喪我の状態について問うと、子綦は天籟について語る。子綦は天籟について語ることにより、暗黙のうちに喪我について偃の問に答えるのである。天の風は無色無音であるが、それが地上に吹き無限の音色を奏で地籟を発す

る。逆に言えば、地上の物体は風の流れを受けることによって無限の地籟を奏でる。音を発するには、無音にひとしい天風が必要なのである²⁶⁾。老荘思想は、万物の根源にこのような「無」の実相をとらえる。「無」は「無い」であると同時に「繁茂している状態」、即ち「無限の数」である²⁷⁾。「無」は「無い」と「無限」が同体である呼吸する宇宙である。子綦の虚脱した状態は天籟、即ち「無」につながるものであり、それは近代合理主義社会の0とは全く異なる境地である。福永光司は、『莊子』の「虚」を下記のように説明する。

莊子において気とは、「天地の一気」といい、「陰陽の気」「六気」といわれるように、宇宙に遍満し、一切万物を一切万物として成り立たせる原質であった。人間もまたこの気を受けて人間となるのであり、人間のあらゆる営みがまたこの気に支えられてはたらきとなるのであった。つまり宇宙と人間とは本来同質なのである。莊子はこの宇宙と人間の同質において、あらゆる人間的な作為の浄化を考えているのである。彼はその宇宙的に浄化された人間の心的境地を「虚」とよぶ。「之を聞くに気を以てせよ」とは、あらゆる人間的な作為を放下して、人間が本来それと同質である宇宙そのものと一つになることであるが、この宇宙そのものと一つになった純粹さを「虚」というのである。虚とは何もない (nothing) というのではなくして、自己を宇宙的な自己にまで止揚することである。自己を宇宙的な自己にまで止揚するから、そこには何ものにもとらわれない自由無碍なはたらきが成立する。いわゆる「天地の一気に遊ぶ」(大宗師篇) というのがこれであり、気を以て聴くとは、天地の一気に遊ぶことなのである。そして天地の一気に遊ぶとは、莊子の逍遙遊にほかならぬから、「虚」とは逍遙の遊びを遊ぶということである²⁸⁾。

子綦の我れを喪れた「虚」の状態は、何もない (nothing) 状態ではなく、逆に宇宙を自由に逍遙し遊ぶ気に満ちた本来の我れということになる。我れを忘れ、自然の流れに乗っているという点で子綦と糸を紡ぐ老婆は共鳴するのである。老荘思想において「我れを喪れた状態」と表現されている事柄は、D.H.ローレンスの言葉を用うと、表層意識がかき消え、自意識もかき消えた状態ということになる。老荘思想も D.H.ローレンスも、気がかりとか自意識といった表層的な意識がかき消え、宇宙の流れや自然界を流れる諸々の流れとともに屈託なく流れている生命に、その本来の生命を感知していると言える。

福永光司は、「世間の人間は、道——真実在の世界がこの現実世界を超絶した、何か深遠で幽玄な形而上的な別世界でもあるかのように考える。しかし、超越的な道はこの現実世界の中にこそあるのであり、眼前の事象の中にこそあるのである。」と述べている²⁹⁾。緑に芽ぶく柳、春の

夕闇に響く小鳥のさえずり、路傍の石。そして、糞・小便に至るまですべてが自ずと然りと流れている流れであり、「道」である。

3. 『無意識の幻想』の中で語られている 根源意識

『無意識の幻想』(1922)は児童意識 (child consciousness) について書かれた書物でもある、と D.H.ローレンスは述べている³⁰⁾。赤子、幼児、児童の中に息づく根源意識を捉えるローレンスの直観力は、深く冴え、生き生きとしている。

「子供達を集めて、頭脳を通して教えるのは、正に悪である。それは動的意識 (dynamic centers) を全く餓死せしめ、不毛の頭脳知識を代償として得るにとどまるのだ。」とローレンスは述べている³¹⁾。我々は教育を通して子供の知性を啓発しようとしているが、実際にはその逆を行っているのであり、言葉を媒体にして子供の頭脳に知識を大量に詰め込み、それによって根源の意識中枢を歪め、窒息せしめ、餓死せしめていることになる。D.H.ローレンスが根源意識 (primal consciousness) とか根源意識中枢 (primary centers of consciousness) と称している意識は、肉体の深奥に備わった意識である。それは知性以前の (pre-mental) ものであり、認識 (cognition) とはなんら関係がない、動物にも同じように根源的に備わっている意識である。我々が生きている限り、意識のダイナミックな根幹として活動し、その動きから最終的に心 (mind) が生み出される³²⁾。『無意識の幻想』の中で D.H.ローレンスは、人間の肉体の深奥にある根源意識中枢を次のように描いている。

人間の根源意識の第一の座は、太陽叢 (solar plexus) であり、胃の背後に位置する大いなる神経中枢である。親の両核が融合する受胎の瞬間に、肉体的にも精神的にも確と成立する意識である³³⁾。あらゆる人間、あらゆる生物は、受胎の瞬間に、吾れは我れなりという疑問を容れぬ最奥完全の意識を得る。この意識は生の最初の意識である。母の胎内で母の血流を導く中心であり、臍の緒が絶たれた後も、ここから発せられる闇い電流のような意識の流れが生を紡いでいく。太陽叢からまず最初に子と親との間に生気に満ちた交通が起る。太陽叢なる闇い知性以前の意識中枢から子供は盲目的に口を開き、乳房を求める。母親も己の太陽叢で深くこれを捉える。赤子と父親との間にも深い磁回流が流れる。赤子の全生命原形質を導いて、これを強力に生気づけ、力づける生気満々たる牽引力が父親の太陽叢から流れる。子供には現前する男の肉体から発する振動波が必要なのであり、これが欠ければ、幼児は必然的に精神的栄養不足になる、とローレンスは言う³⁴⁾。

この太陽叢からあたたかも己の城の城塞から見おろすように人は周囲を見回し、その美しく豊かな大地、麦や果実や

家畜、従者たちの小屋、愛する者たちの家を眺めわたす。この太陽叢から人は、全世界は己れのものであり、すべては善きかなと観ずる。太陽叢はいつさいの交感系統の中枢であり、そしてその中央に吾れは我れなりが位置する。太陽叢においては、よろずのものは我において一に帰するのである。子供の太陽叢の中で親の両核は生涯存在し、滅びることはない。両親の血のエッセンスは子供の太陽叢の中でそれぞれ裸の火花を散らし、血の絆は滅することがない。

第二の根源意識中枢は、肝臓の近くに位置する腰椎神経節 (lumbar ganglion) である。この腰椎神経節は受精卵が二つに分裂する時に芽生える。腰椎神経節においても吾れは我れなりと知るが、ここでは非我なる一切の宇宙から我れを識別する。吾れは我れなりと言っても、それは我が宇宙と帰一するからではなく、我れが全宇宙から区別されるがゆえである。我れが他の万物から識別されるが故に吾れは我れ自身たりえるのである。腰椎神経節は意志中枢であり、子供が己と母親を区別し、孤我を主張し、さらに周囲に己れの権力 (power) を示すのはこの腰椎神経節による。この中枢から兇暴な小さき者の誇りと旺盛な元気が発し、ある時は歓喜して蹴り、またある時は乳房を無理無体につかみ、またある時は我儘を言って暴れる³⁵⁾。

太陽叢と腰椎神経節は下部意識中枢であり、意識体系はさらに横隔膜上方に心臓叢 (cardiac plexus) と胸部神経節 (thoracic ganglion) と称する上部意識中枢を形成する。心臓叢と胸部神経節は、受精卵が四つに分裂する時に芽生える。

胸の中央に位置する心臓叢においては、もはや吾れは我れなりという闇い勝誇った意識はない。ここで捉えるのは、君は君だという悦ばしき啓示のみである。驚異は自己の外にあるのであり、喜び溢れる渴望を抱いて、自己の外にあるもの、自己を超えたもの、自己に非ざるものに向う。非我なるものが、そこでは偉大な積極的な実在となる。子供は驚異の念に溢れつつ母親を求め、優しき母の顔を見出す。子供は至福に包まれ、大いなる歓喜が湧起る。この歓喜は心臓叢から波打ってくるのである³⁶⁾。

両肩の間の脊椎の近くに位置する胸部神経節は、権力 (power) の神経節である。子供が至福にひたって母を求め抱かれる時、それは上方の交感形式によって自己を達成する。しかし、子供は次に母を見棄てる。母を意識することをやめる。母親がさらに子供の愛を強要すれば、子供は母親に背を向け、嘲弄の眼で母親を見つめる。逆に母親が子供をなおざりにするならば、子供は泣き叫んで母の愛と注意とを引こうとする。この憐れっぽい哀訴は、胸部神経節の強制の一形式である。神経質な客観的な批判意志、共感の周到な強要、哀憐と愛撫に肩すかしを食わせること、悲しげにあるいは愛情ありげに見えながら同時に愛を蹂躪すること、これらは胸部神経節から発する意志である。しかし、生が真に調和のある時には、胸部神経節は飽くこと

を知らぬ好奇心、事物を分析しようとする欲望、発見発見する欲望などの中枢となる³⁷⁾。

D.H.ローレンスは、人間の根源意識が受胎の瞬間に芽吹き、肉体の深奥に宿る意識の根幹であると捉える。太陽叢を中心とし、これらの四つの根源意識中枢が肉体の深層でダイナミックに働き、生命は燃焼していくのだ、とローレンスは捉えるのである。

胎内にある子供は母を知的に捉えることなどももちろんありえない。しかし、子供と母親の間には絶えずヴァイタルな振動波が交流しているのであって、子供は根源意識で母親から送られてくる振動波を捉え、母親を知るのである。この意識は全く非観念的、非知性的な働きである。四つの根源意識が十分な活動状態に入ると、赤子の眼が視力を獲得し始め、口が話し始め、耳が目覚めて音を識別し始める。そしてこの結果として、精神が目覚めて印象を受け始め、最初の統制をおこない始める³⁸⁾。

知識に関してD.H.ローレンスは、「まず根源意識が揺り動かされ、それが知的意識にまで昇華したもののみが有効である。根源意識に根ざさない外来の観念は、若樹に打ち込まれた釘のように危険である。」と述べている³⁹⁾。例えば、学校教育の中で7才の子供に蛙について教えるとする。教師は、蛙が両生類であり、その子はおたまじゃくしであることを子供に伝える。しかし、言葉を通して伝えられる知識は、子供の生命にとっては有効とはならない。蛙を手でつかみ、そのヌメツとした冷たさ、ピョンと跳ねる躍動感、それらが子供の感性を通じて根源意識を揺り動かすのでなければ、子供は蛙の生命を捉えられないのである。

ローレンスは、「子供は外なる宇宙の対象と、直接的なダイナミックな交渉を持つヴァイタルな小有機体であり、己れの胸と腹の力によって、深奥なりアリズムで、生物の本質を知覚する。」と述べている⁴⁰⁾。子供というものは物を理解してはならないのであり、子供特有のやり方で物を所有しなければならない、とローレンスは言う。子供が抱く映像は、大人のものとは異なる。8才の少年が馬を見る時、首から長く垂れた髪、波打つ巨体、大きな眼に圧倒されるのであり、彼が画いた馬の横顔に眼が二つ付いていても、それはそれで正しいのである。少年の網膜に映る馬の映像と彼の根源意識が捉える映像とは別なのである。彼の根源意識は、馬という強力な生気に溢れた存在に圧倒されるのであり、根源意識は強く暗いおぼろげな映像に充たされるのである。子供は馬の生命の本質を捉えようとするのであり、大人のように知的に正確に馬を理解しようとするのではない。また子供が顔を描く時、顔に眼があれば、顔全体が眼になる。子供の魂は眼の神秘に打ち勝てないのである。これらの子供の抽象は、観察に基づくのではなく、彼らの主観的誇張に基づくのである⁴¹⁾。子供の主観とは、子供の肉体の深奥にある根源意識がダイナミックに働き捉えた結果である。

子供という小さな哀れな植物は、学校と名付けられた温

床に種蒔かれ、そこで観念を発芽せしめられる。青白い病的な観念や理想がうようよと芽を出す、根もなければ、生命もない。様々な観念が、それでも結構頑丈な芽を出す、生命自体を犠牲にしてであるとローレンスは言う⁴²⁾。学校は子供に知的に理解することを要求する。言葉や文字、数字、図形を使い、それらを通して大脳思考で理解させようと訓練する。子供の大脳意識は作動し続け、その結果子供がその肉体の深奥にある根源意識で対象を捉えることが抑圧される。子供の表層意識は絶えずそのレーダーを張りめぐらし、活動し、自意識が覚醒する。「今や、学校は自意識の温床である。」とローレンスは述べている⁴³⁾。本来ならば没我で遊び呆けている年令の子供たちが、自己の自意識に苛まれ、退屈しきって、いじめに走るのが現状である。またローレンスは、「理想主義を存分に吸いこむと、人々は救いようもないほど自意識的になる。即ち、偉大なる感情中枢はもはや自発的に動かなくなり、常に頭脳の支配を待つようになる。」と述べている⁴⁴⁾。老荘思想も、覇道を却けて王道を説く儒家の理想主義をも、人為の賢しさを弄するものとして批判している。為さずして自ら成る無為自然の妙理を悟り、一切の過剰な人欲を切り棄ててゆくのが老荘思想の無為の姿勢である⁴⁵⁾。

D.H.ローレンスも老荘思想も、知的認識に常に縋り生を送ることを戒める。又、両者は実在に対する知的認識の破綻性と分裂性をも訴えている。両者とも知識人であり、知的認識の必要性は認めるが、観念がさらに観念を増殖し、また理論が一人歩きしさらに理論を積み上げていくことの殺戮性を両者とも経験し、認識していた。D.H.ローレンスは、肉体の深奥に、生を律する根源意識を捉えた。その無意識の根源から発する波動により、生命は根本的に営まれていくのだとする。根源意識は森羅万象と呼応し、未知から来る美しい流れを受けとめる。この姿勢は、老荘思想の無為自然と深く共鳴するものである。そこでは、知的認識に基づく判断が生営みを決定づけるのではないのである。

赤子はその太陽叢から乳房を求め、母親も腹部の生命中枢で深く強くそれを捉える。それは健康な野性的な母親の無心の姿 (the true mindlessness of the pristine, healthy mother) である、とローレンスは描写している。乳を求める赤子の生命の流れに、その根源意識中枢から応える母親の姿を無心とすれば、大切な物を壊されその根源意識中枢から発する怒りで幼い息子の尻をひっぱたく父親も、また父親の迫力にひたすら圧倒され根源意識中枢からヒンヒンと泣き叫ぶ幼い息子も、いずれも無心と言えよう。この時の父親の怒りには、「こいつは日頃悪いことばかりしている。時には懲らしめてやらねば。」というような表層的雑念は無いであろうし、泣き叫ぶ幼い息子の内には、「痛い！こんな罰を下す父親は憎い。」というような自意識は芽生えていないであろう。幼い息子は父親から発せられる純粋な怒りの威力に圧倒されているだけである。これら

は、根源意識中枢で結びついた母と子そして父と子の、家庭でよく見かけられる無心な情景である。

4. 無 心

『莊子』養生主篇で莊子は、人間がこの現実世界において生を全うするためにいかにすべきかの根本原理を明らかにする。生を養う秘訣とは、「道」に従うことにほかならない。それは一切の人間的な作為を捨てて、万物の自然に冥合することである。己れの生を全うし、一切の束縛を放擲した自由な生を楽しもうとする者は、知と欲の放埒から自己を守り、善悪の彼岸に立って、ひたすら天理の自然に従うことを生活の根本原理にせよ、と莊子は説く。そして庖丁という料理人の話を通して、「道」の一相を示す⁴⁶⁾。

庖丁は文恵君のために牛を解体する。庖丁の手、肩、足、膝はリズムカルに動き、牛の肉は骨からサクリサクリと音をたてて離れ、骨を離れた肉はパサリと落ち、次々に肉は骨から切り離されていく。庖丁の鮮やかな手さばき、身のこなしは、桑林の舞を舞っているかのようなのである。文恵君は、庖丁の技に感歎し、庖丁の技を誉めるが、それに対して庖丁は、庖丁が願ひ求めているのは「道」であって、技以上のものであることを告げる。そして庖丁は文恵君に、庖丁が経てきた修行の過程を話す。「始め巨の牛を解せしの時、見るところ牛に非ざるものなかりき。三年の後にして未だ嘗つて全き牛を見ざりき。今の時に方つては、巨れ神を以て遇いて目を以て視ず。官知止みて神欲行なわ。天理に依りて、大いなる郤を批ち、大いなる竅を導き、其の固より然るところに因う。技の肯綮を経るだに未だ嘗つてせず。而るを祝んや大いなる軋をや。」庖丁が初めて牛を料理した時には、目に映るものは牛の姿ばかりであったが、三年目になると、もはや牛の姿全体が見えるというわけではなくなり、今では庖丁は「神」をもって牛に向い、目で視ることはなくなったという。福永光司も森三樹三郎も「神」を「心」と捉えている。老莊思想は、自ずと然りと流れ森羅万象を生成消滅している「道」を絶対実在としている。故に無神論の基調の上に立つのであり、ここの「神」も人格神と捉えることはできない。講談社『大辞典』の「示」に関する解説のひとつによれば、「示」は二と)(の合字であり、二は天を表し、)(は日・月・星の三を表す。「示」は天・日・月・星を表し、それに「申」が加わり、「神」は‘宇宙の必然的な流れ’を表すとも解釈できる。「神を以て遇いて」とは、宇宙・自然界を流れるひとつの流れとなつて、つまり、「道」のひとつの必然的な流れとなつて、と捉えることができよう。老莊思想においては「神」という漢字を人格神を表わす言葉として捉えてはならないのであり、老莊思想において「神」という漢字が‘宇宙の必然的な流れ’を表すと解釈することは妥当である。そのように捉えると、正に庖丁は牛を解体する技を修行することによって、「道」に同化する境地を求めた

のであった。庖丁は牛を視ることもなくなり、「官知」即ち、あらゆる感覚知覚はその動きをひそめ、「神欲」だけが活発になり、「天理」即ち牛の体にある本来自然の理に従い、「大郤」即ち骨と肉のつけねにある隙に刀を振るい、骨筋の大きな竅に刀を導き入れ、牛の体の本来の成り立ちに従って解体していく。「大軋」即ち、大きな骨に刀を打ちあてることもなく、「肯綮」即ち、骨と肉の微妙に入り組んだ部分にも刀をあてることがない⁴⁸⁾。庖丁は、その肉体の中を流れる宇宙の流れに身も心もゆだね、無心となり、自ずと然りと牛刀を振るったことになり、

日本武道の弓道八段の資格審査では、的に向つた求段者が弓の弦を張り矢を放つ瞬間、求段者の視線がチラと的に向つたならば、その時点で失格となるという。弓道八段は、視ずに的に射る神技が求められるわけである。意識が全て体の中心に向い、体じゅうの精気が体の中心で渦をなし、ひとつの磁極となり、相対する的という磁極に向つて生命が瞬間的に流れるというようなことなのであろうか。明らかなことは、それは、的に意識的に射るという目的達成をめざす有為の合理主義から外れた世界であり、『莊子』の庖丁の世界に近い世界であらうということである。現代社会で自意識や雑多な表層の意識を自己からかき消すというのは、至難な業である。自意識が常に没我を妨げている。武道、書道、華道、茶道等に励む者の中に、没我の宇宙的瞬間を求め修行を積む者があることも確かである。福永光司は、「ひたすら自然に随順して、随順しているという意識さえもなくなった無心忘我の境地、いわゆる“吾れが我れを喪れた”境地こそ道というのである。」と述べている⁴⁹⁾。

D.H.ローレンスは、観念を頭脳にいっぱい詰めこみ、頭でっかちとなつた現代の偏つた精神主義を批判した。D.H.ローレンスにとって、精神とは肉体の内奥の根源意識中枢がダイナミックに生き生きと働き、その結果生み出されてくるものであった。精神は観念が生み出すものではなく、老莊思想においても、精神とは人間の頭脳思考が生み出す観念などではない。『老子』に「道」を描写した次のような箇所がある。「道の物為る、惟だ恍、惟だ惚、惚たり恍たり、其の中に象有り。恍たり惚たり、其の中に物有り。窈たり冥たり、其の中に精有り。其の精甚だ真、其の中に信有り。」そもそも道という実在は、ただ仄暗く定かならず、仄暗い中にも何やらが象あり、何ものかが実在している。奥深く幽な中に靈妙な精気がこもり、その精気はこの上なく真実で確かさがある⁵⁰⁾。

『老子』のこの箇所の精とは、森羅万象を生成消滅する流れ、「道」にこもる精気である。『大辞典』によると、青は生と丹の合字であり、生の象形は草木が地上に芽を出し発育する形である。丹の字源は丹砂という赤い石の名であり、丹は赤色を示す。青は生と丹から成り、草木が芽吹き丹になるまでの色であり、草木生成の色を表わす。つまり青は緑色を表すのであり、青には草木生成の生命の流れが

ある。精は米と青から成り、人間の生命を維持する穀類である米と、生命の流れを抱いた青とから精は成り立っており、精は生命の心髄である「道」の流れを表すと解釈できるのではなからうか。D.H.ローレンスにとって、精神とは生きて流れている肉体の根源から生み出され育まれていくものであった。正にここにおいてもD.H.ローレンス思想と老荘思想は共鳴するのである。

「D.H.ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論」—その1, その2, その3で論じてきたように、両者の思想は根本的なところで共鳴点を持っている。両者とも自然あるいは宇宙と対峙し、そこに流れている流れを捉えているという点で根本的に共通しているのである。その土台に両者とも立脚しているが故に、人間性とか知識とか意識という事柄に関する視点においても共鳴するのである。D.H.ローレンスは、その生涯において老荘思想にどこかで出会っているかもしれないが、筆者はD.H.ローレンスが老荘思想に関して記した記述にまだ出会っていない。もしD.H.ローレンスが老荘思想から影響を受け、これらの共鳴点が発生しているのだとしたら、根本的なところで共鳴しているので、ローレンスの老荘思想に関する記述がいくつかあるのが当然である。しかし、それが無いということは、両者の共鳴点は、自然あるいは宇宙と真摯に対峙した者たちに普遍的に共通するものであると筆者は考える。

註

- 1) 田形みどり (2004): 「D.H.ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論—その1」, 『海—自然と文化』, 東海大学紀要海洋学部第2巻第3号 参照
- 2) D.H.Lawrence (1969): *Psychoanalysis and the Unconscious and Fantasia of the Unconscious*, The Viking Press, p.127
- 3) ① *ibid.* 2), pp.118-9
② D.H.ローレンス, 小川和夫訳 (1968): 『無意識の幻想』, 南雲堂, p.109
- 4) D.H.Lawrence (1967): *A Propos of lady Chatterley's Lover and Other Essays*, Penguin Press, pp.93-4
- 5) *ibid.* 3), ① p.119 ② p.110
- 6) *ibid.* 3), ① pp.119-21 ② pp.110-3
- 7) 福永光司 (1968): 『老子』新訂中国古典選, 朝日新聞社, pp.113-23
- 8) 森三樹三郎 (1995): 『老子・荘子』, 講談社学術文庫, p.51
- 9) 金谷 治 (1998): 『荘子』第三冊 (外篇・雑篇), 岩波文庫, pp.149-50
- 10) 森三樹三郎 (2001): 『荘子II』, 中央公論新社, p.131
- 11) 田形みどり (2007): 「D.H.ローレンス思想と老荘思想との共鳴点に関する一試論—その2」, 『海—自然と文化』, 東海大学紀要海洋学部第3巻第3号 参照
- 12) 金谷 治 (1998): 『荘子』第一冊 (内篇), 岩波文庫, pp.61-5

- 13) 福永光司 (1987): 『荘子』内篇 中国古典選12, 朝日新聞社, pp.87-94
- 14) *ibid.* 19), pp.22-6
- 15) *ibid.* 7), p.7
- 16) *ibid.* 13), p.116
- 17) 福永光司 (2003): 『荘子・古代中国の実存主義』, 中央公論新社, pp.18-9
- 18) *ibid.* 10), p.140
- 19) 森三樹三郎 (2001): 『荘子I』, 中央公論新社, pp.41-4
- 20) *ibid.* 13), pp.120-1
- 21) ① *ibid.* 19), pp.251-3 ② *ibid.* 7), pp.113-23
- 22) *ibid.* 13), pp.58-60
- 23) *ibid.* 13), pp.63-4
- 24) D.H.Lawrence (1936): *Phoenix*, The Viking Press, p.118
- 25) ① D.H.Lawrence (1967): *Twilight in Italy*, Penguin Books, pp.25-32
② 堀田幹夫, 田形みどり (1990): 「D.H.ローレンス: 「イタリアの薄明」に登場する糸を紡ぐ老婆—自己充足する世界」, 東海大学紀要 海洋学部一般教養第16輯, pp.105-16 参照
- 26) *ibid.* 19), pp.22-6
- 27) *ibid.* 1), p.87 参照
- 28) *ibid.* 13), pp.172-3
- 29) *ibid.* 17), pp.134-6
- 30) *ibid.* 3), ① p.190
- 31) *ibid.* 3), ① p.127 ② p.122
- 32) *ibid.* 3), ① p.74 ② p.39
- 33) *ibid.* 3), ① pp.74-5 ② pp.39-40
- 34) *ibid.* 3), ① pp.72-3 ② pp.35-8
- 35) *ibid.* 3), ① pp.75-7 ② pp.41-3
- 36) *ibid.* 3), ① pp.77-9 ② pp.43-7
- 37) *ibid.* 3), ① pp.79-80 ② pp.47-9
- 38) *ibid.* 3), ① p.87 ② pp.60-1
- 39) *ibid.* 3), ① pp.112-3 ② pp.100-1
- 40) *ibid.* 3), ① p.126 ② p.119
- 41) *ibid.* 3), ① pp.125-7 ② p.118-22
- 42) *ibid.* 3), ① pp.105-6 ② pp.89-91
- 43) *ibid.* 3), ① p.122 ② p.115
- 44) *ibid.* 3), ① pp.131-2 ② p.129
- 45) *ibid.* 7), p.171
- 46) *ibid.* 13), pp.138-47
- 47) ① *ibid.* 8), p.37 ② *ibid.* 18), pp.8-9
- 48) ① *ibid.* 13), pp.138-47 ② *ibid.* 19), pp.75-80
- 49) *ibid.* 13), p.84
- 50) ① 楠山春樹 (2002): 『「老子」を読む』, PHP 文庫, pp.25-6
② *ibid.* 13), pp.123-8

謝 辞

本稿の査読を通して、貴重な助言をくださった査読者に深く感謝いたします。

参考文献

- 打木城太郎 (1979):『死んだ男と』, 栗田企画, 総頁数196
- 小川環樹 (2003):『老子』, 中央公論新社, 総頁数187
- 金谷 治 (2001):『老子』, 講談社学術文庫, 総頁数283
- 金谷 治 (1998):『荘子』第二冊, 第四冊, 岩波文庫, 総頁数283, 246
- 楠山春樹 (2004):『老子入門』, 講談社学術文庫, 総頁数273
- 鈴木大拙, 上田閑照編 (2005):『東洋的な見方』, 岩波文庫, 総頁数 349
- 鈴木大拙 (2002):『無心ということ』, 大東出版社, 総頁数 221
- 張 鐘元, 上野浩道訳 (1998):『老子の思想』, 講談社, 総頁数341
- ヘリゲル, オイゲン, 柴田治三郎訳 (2007):『日本の弓術』, 岩波文庫, 総頁数 122
- 福永光司 (1976):『荘子』(外篇) 中, 朝日新聞社, 総頁数 254
- 福永光司 (1993):『荘子』(雑篇) 上・下, 朝日新聞社, 総頁数304, 262
- ポプラウスキー, ポール, 木村公一・倉田雅美・宮瀬順子編集・訳 (2002):『D.H.ローレンス事典』, 鷹書房弓プレス, 総頁数758
- 森三樹三郎 (1990):『「無」の思想』, 講談社現代新書, 総頁数216
- 森三樹三郎 (2003):『老荘と仏教』, 講談社学術文庫, 総頁数299
- ローレンス, D.H., オルダス・ハックスレー編集, 伊東整, 松永定訳, (1972):『D.H.ローレンスの手紙』, 彌生書房, 総頁数322
- ローレンス, D.H., 羽矢謙一編集・訳 (1971):『愛と生の倫理』, 総頁数161
- ローレンス, D.H., 福田恒有編集・訳 (1956):『性・文学・検閲』, 総頁数222
- Adam, Michael (1975): *D.H.Lawrence and The Way of The Dandelion*, The Ark Press, 32 pages
- Sagar, Keith (1979): *D.H.Lawrence: A calendar of his works*, Manchester University Press, 294 pages
- Lawrence, D.H., Mara Kalnins ed. (1980): *Apocalypse and the Writings on Revelation*, Cambridge University Press, 249 pages
- Lawrence, D.H., Warren Roberts and Harry T. Moore eds. (1978): *Phoenix II*, Penguin Books, 640 pages
- Lawrence, D.H., Michel Herbert ed. (1988): *Reflection on the Death of a Porcupine and Other Essays*, Cambridge University Press, 492 pages
- Lawrence, D.H., Simonetta de Fillippis ed. (1992): *Sketches of Etruscan Places and Other Italian Essays*, Cambridge University Press, 387 pages
- Lawrence, D.H., Vivian de Sola Pinto and F. Warren Roberts eds. (1971): *The Complete Poems*, The Viking Press, 1078 pages
- Lawrence, D.H. (1990): *Women in Love*, Cambridge University Press, 450 pages

要 旨

「D.H.ローレンスと老荘思想との共鳴点に関する一試論——その1」では、老荘思想の「道」とD.H.ローレンスが語る宇宙の流れ(flow)あるいは自然界の流れが共鳴することを論じた。「その2」においては、老荘思想の非情とD.H.ローレンス文学における非人間的、非人格的要素との共鳴点を論じた。本論「その3」では、知識・観念・意識に関する両者の共通点を論じている。

D.H.ローレンス、老子、荘子は自然界に生を受けた一生命体として、自然界の回流の中でその生を全うすることを希求したのであった。彼らにとって、過剰な知識・観念・自意識・賢^{きみ}しらな意識は、生の成就を妨げるものであった。D.H.ローレンスは、己の肉体を抱え屈託なく無心に流れる自然界の生命体を愛し、自らも自然界の流れに合流することを希求した。老荘思想は、無心になり、森羅万象を生成消滅する「道」に同化することを希求したのであった。

キーワード：D.H.ローレンス、老子、荘子、自然